

6 総合討論

○松方 それでは、総合討論を始めたいと思います。まずはフロアからコメントや質問がありましたらお願いします。

「国家と国家の関係」は構造と考えるか



○質問者A 廣野さんの「構造とは何を指すのか」というご質問に対してコメントさせていただきます。村井章介の議論によると、「構造」に当たるものは「国家と国家の関係」で、それが国と国との間で横断するように活動する人々の動きを

規制したり、今でいう条約とはまた違うにせよ「決まりごと」を作ったり、また人の流れを規制したりする。たとえば船は1年に1回しか来てはいけないといった約束を作ったりする。そういうところが廣野さんのおっしゃる「構造」に当たるのかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

○廣野 「国家と国家の関係」は国家同士のバイな（二国間の）「リレーションズ」であって、「システム」ではないように思われます。特に『国書がむすぶ外交』が舞台としているところを「国と国との関係」という形で捉えてしまうと、ここできわめてリッチに描かれた歴史が非常に矮小化されてしま

うのではないかという危惧を覚えます。というのは、本書で書かれているのは、もっと重厚で、何層にも関係があって、それが層でもなく、非常に複雑に絡み合っている「ネットワーク」もあり、国家同士や人々の関係を含む「リレーションズ」を越えて、「システム」としての構造を考えると、「国家と国家の関係」だけでは捉えられない何かがあるんじゃないかと思うからです。それはかつて「華夷秩序」という言葉で片づけられていました。それを松方さんはそうしたダイコトミーで片づけられる問題ではないとご批判されましたが。

私は村井章介氏の本を拝読したことはないのでもわかりませんが、村井氏がおっしゃっているものが答えになり得るのかということ、正直なところ、クエスチョンマークが付くように思います。

実証より理論を指向するアメリカ人

○質問者A もう一つ、廣野さんか山下さんに伺いたいことがあるのですがいいでしょうか。私は日本史の研究者で、今日の話で言うところの「重箱の隅をつつく」ような研究をしています。日本でこういう歴史学を研究している者からすると、欧米、特にアメリカの歴史研究者は割と理論を重視して研究をしているように見えます。その点は国際関係論と親和性があるように思うのですが、山下さんや廣野さんから見ると、アメリカの歴史学はどのように見えるのでしょうか。歴史学と国際関係論の協働につながるかどうか、という話になるかと思いますが。

○廣野 たしかに国際関係学でもアメリカは実に理論指向が強く、冷戦という文脈の中で、科学的な考え方で冷戦構造を正当化することが国際関係学の基本スタンスでもありましたので、歴史からどれだけ離れて科学化できるかという姿勢がずっと国際関係学の主流でした。ですから、アメリカでは国際関係学を学ぶ際に「英国学派」の勉強をする人はほとんどいないんです。この学派は歴史から国際関係を考えていこうという立場を取っていますから。

ただこれは特に冷戦期以降の話であって、もっと昔にさかのぼればアメリカも必ずしもこうではないんですけれども、一般的にはそういった違いがアメリカとイギリスにあると言われています。

○山下 前のやりとりに戻りますが、構造や枠組みという言葉は、実は使うのが難しいものだと思うのです。非常に表面的なことを指して「ここに構造がある」とも言えてしまうからです。廣野さんの前でちょっと言いにくいんですけど（笑）、国際関係論の人が言うような「構造」なんて、多くの場合、実に薄くて浅いレベルの構造なんです。関係のパターンがあって、観察できて、ある程度国際関係論で実証できる構造がある、と言っただけなんです。でも本当は、その下にもうちょっとディープな構造みたいなものがある。

また「枠組み」にしても、ある程度、意識化できる枠組みと意識化がすごく難しいディープなレベルの枠組みがある。だから、構造や枠組みと言ったときの「深度」の問題は意外と語るのが難しい。実際、分析に組み込むのは非常に難しいと思うんです。

廣野さんは『国書がむすぶ外交』について、ストラクチャーの発想がない、ストラクチャーに行き着いてないのではないかと指摘されましたが、私は逆に、この本はむしろストラクチャーを指向しているんじゃないかと思います、ディープな意味で。

言語学者のノーム・チョムスキー³⁵が提唱した「生成文法（generative grammar）」がありますね。これは誤解している人が多く、「いろんな言語があるけれど、どの言語にも共通の普遍的な文法的規則がある」ということだと思われている。しかし、チョムスキーが言っているのは、どんな人間でも、ある言語に、ある共同体に放り込まれると、言葉を身につけるだろう、と。ということは、日本語であれ、英語であれ、ベトナム語であれ、どんな言語

35 エイヴラム・ノーム・チョムスキー（Avram Noam Chomsky：1928年～現在）は、アメリカ合衆国の哲学者、言語哲学者、言語学者、認知科学者、論理学者である。チョムスキーは、全ての人間の言語に「普遍的な特性がある」という仮説を基に、その普遍的特性とは、人間が持って生まれた、すなわち生得的な、そして生物学的な特徴であるとする言語生得説を唱え、言語を人間の生物学的な器官と捉えた。

でも身に付けることのできる『構造』を頭の中に持っているのだ、ということなのです。生成文法それ自体は、特定の言語のかたちは取っていない。しかし、メタレベルで言語の構造がそこにある。これこそがディープなレベルでの「枠組み」で、私は、松方さんが支持しようとしておられる新しい枠組みは、外交についての生成文法というか、生成外交とでもいうべきものなのでは、と思ったのです。

そして、実は二番目のご質問と話がつながるのですが、アメリカの歴史学者たちはすごくコンセプチュアルです。とにかくコンセプトを打ち出して、もし仮に実証が十分でなくても（十分なケースもあるんですけど）、コンセプトである程度成功すれば勝てるということに自覚的なんです。多くの国から歴史家が参加する研究プロジェクトに参加したことがあるんですが、観察していると、明らかに英語圏の歴史家はコンセプトでぐいぐい押してくる力が強い。素人が見ても「それはいくらなんでも実証が弱いのではないか」と思うときもあるのですが、コンセプトの力が強ければそこで規定した史観の枠の中で勝負して勝てることを彼らは知っている。それはかなり浅いレベルでの枠組みで、本当はもっと深いところで議論しなくてはいけないのですが、彼らはそんなに深いところで史観などを考えなくても浅いレベルでヘゲモニーを取っちゃえば勝てると分かっているので、非常に言葉を巧みに操って、コンセプト重視でやっていると思います。

でもそれは悪いことばかりではなくて、勝ってしまえば、その枠組みの中で（その枠組みを提示した実証研究が貧弱だとしても）、他の実証研究を大いに誘発することがある。だから「それだけ学問が豊かになるのだからいいじゃないか」といった、ある種の啓蒙的楽観主義もあると思います。長い歴史家コミュニティー全体の知識の蓄積の中で十分役に立っていると思込める。そういった傾向もあるんじゃないかと思います。

ヨーロッパとアメリカ、ラテンとアングロサクソンの違い

○質問者B 廣野さんのお話の中に英国学派は比較的歴史を重視するという

お話がありました。私はタイの歴史を専門としていまして、タイの歴史を研究している学者なんて世界でも数えるほどしかいないのですが、その中でもアメリカのタイ史研究者とヨーロッパのタイ史研究者とでは指向が違う感じがしています。やはりアメリカは理論重視で、ヨーロッパは比較的、我々日本人、実証史家に近いような。特に大陸側のドイツとかオランダの研究者には実証を重視する印象があります。「西洋」といっても、その中に違いがあるように思いました。

○質問者C 私はイタリア人の研究者と付き合うことが多く、彼らは「アングロサクソン系」という言い方をよくします。おそらく史学家の中ではイタリア、フランス、スペインなどのラテン系が一つのくくり、イギリス、アメリカの研究者がアングロサクソン系としてまた別のくくりとして分かれているように思います。先ほどお話に出たとおり、やはり理論やコンセプトを話すことが得意なのがアングロサクソン系で、実証にこだわるのがイタリア史を含めたラテン系。イタリア人の研究者も二者の違いを意識しています。そしてそれはおそらく、それだけ史料をたくさん持っているからではないかと思うのです。イタリア史は特に膨大な史料の蓄積があるので、史料そのものに集中してしまうのかもしれない。

以下は意見というより感想になりますが、普段は史学系の研究者の方との学会や研究会が多く、どうしても重箱の隅をつつくような話をしがちなので、今日は広い視野で普段聞くことができないお話を聞くことができ、本当に勉強になりました。ありがとうございました。

重箱の隅をつついているとどうしても自分自身の立ち位置が見えなくなってきて、特に自分が書いたものに表れなくなるので、立ち位置を常に意識しなくてはと、今日のお話を戒めとして受け止めている次第です。

国際関係学とはどのような学問か

○質問者B 廣野さんにお伺いしたいことがあります。国際関係学というも



のに全くなじみがなく、無知で申し訳ないのですが、国際関係学がどういう学問なのか、そして学問として形成されていった背景はどういうものかをお聞きしたいのですが。

○廣野 もともと国際関係学は政治学からの枝葉分かれて生まれた存在で、国際関係学として「学問」となったのは20世紀なんです。ただ今でも、国際関係学という学問は存在しうるかという議論は行われています。

一般的な説明としては、リベラリズムが力を増した両大戦間期（1919年～1938年）にウッドロー・ウィルソン³⁶が自由主義を唱え、民主主義が重要なのだと言っているところで、E・H・カーが「いや、国家間の関係を見ようとするならリアリズムで考えなくてはいけない、それぞれの国が国益を求めて動く様子を見るのが国際関係なのだ」と言ったあたりから始まったと言われます³⁷。そのときにはもちろん国際関係学という言葉はなく、政治学の中の一領域、国と国との関係を考える一つの領域と捉えられていました。

ただ当然ながら、国と国との関係そのものは何千年も前から存在しますよね。現在の中国と米国の関係を指すのに「トゥキディデスの罠（The

36 トーマス・ウッドロー・ウィルソン（Thomas Woodrow Wilson：1856年～1924年）は、アメリカ合衆国の政治家、政治学者であり、第28代アメリカ合衆国大統領である。ウィルソンは、第一次世界大戦参戦後、大戦後の国際社会のあり方を構想した14箇条の講和原則を議会で発表した。それは、大戦後のパリ講和会議でも、講和の原則とされた。さらに彼は、主権国家群による集団安全保障体制を確立するために、国際連盟（League of Nations）を提唱した。

37 エドワード・ハレット・カー（Edward Hallett Carr：1892年～1982年）は、イギリスの歴史、政治家、外交官である。代表作に、E. H. Carr, *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, Macmillan, 1939 (2nd ed., 1946)（井上茂訳『危機の二十年——国際関係研究序説』（岩波書店、1952年）；原彬久訳『危機の二十年——理想と現実』（岩波文庫、2011年））がある。同書は、法律的・道義的アプローチが支配的であった国際関係論においてパワーの重要性を強調する現実主義（リアリズム）の立場を説いた本として知られる。E・H・カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』（岩波新書、1962年）でも有名。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

Thucydides Trap)』³⁸という言葉がよく使われますが、アテネとスパルタの戦争³⁹の時代までさかのぼり、国益を求める国家同士の関係を考えるようになったのが国際関係学の始まりと言われています。

リベラリズムを含む理想主義とE・H・カーが主張した現実主義との論争を、国際関係学では「第1の論争」と呼びます。続いて、1950年代後半からは「第2の論争」が起こります。理想主義も現実主義も、人間性に関する一定の前提に基いた「伝統主義」的な方法によるものであるが、国際関係論は、データの規則性を重視した「行動科学」に基づいたものでなくてはならないとする議論でした。物理学のように、一般的な原則が分かれば、国と国との関係を予測する方法も分かるのだからどんどん理論化しよう、科学化しようという一つの流れと、冷戦期（1946/47年～1989年）に国際関係学がアメリカの外交政策を正当化するための学問になり、学者がアメリカの政権内に入って非常に重要な役割を果たしたという二つの流れが相まって、科学的指向を非常に強く持ちつつ二極構造を正当化する国際関係学へと変わっていきました。

先ほど山下さんのお話にも、コンセプトだけが強く実証は弱い人たちのお話がありましたが、行動科学に基づいた国際関係論の代表格であるネオリアリズムの父といわれているケネス・ウォルツ⁴⁰などもまさに、実証が弱いとよく言われています。しかし彼は、「実証の部分を全部説明していたら科学的な理論にならない。だから、意図的に捨てている。わざと細かいところを見ないことが美しいのだ」と言って理論を構築していく。その理論は今でも非常にパワフルな理論と評価されています。

しかし、冷戦が終わったときに、国際関係学の中で大きなアイデンティ

38 古代アテナイの歴史家、トゥキディデスにちなむ言葉で、戦争が不可避な状態まで従来の覇権国家と、新興の国家がぶつかり合う現象を指す。アメリカ合衆国の政治学者グレアム・アリソンが作った造語。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

39 前431年～前404年にかけて、アテネとスパルタおよびその同盟市（デロス同盟とペロポネソス同盟）の間で行われた大戦争で、ギリシア全土の衰退に重大な影響を及ぼした。『世界史小辞典』、633～634頁。

40 ケネス・ニール・ウォルツ（Kenneth Neal Waltz：1924年～2013年）は、アメリカ合衆国の政治学者である。国際関係における新現実主義（構造的現実主義）理論を提唱した。彼は、抑制と均衡が存在しない国際政治において、大国が権力を濫用することはほぼ必至であり、それが国益に反することも少なくないと主張した。また、核兵器の抑止力を強調し、核拡散は世界平和を脅かすどころか強化するとの主張を展開した。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』（<https://kotobank.jp/dictionary/britannica/>）より引用。

ティー・ショックが起きました。これまで国家の関係を予測しようとして科学的に考えてきたけれど、ソ連の崩壊を全く予測できなかったじゃないか、と国際関係学者の中で猛省が行われました。何が一体悪かったのか。それはソ連の中で、国の中で何が起っているかに目を向けず、実証の部分がないがしろにしてしまったことではないか、と。そこから、やはり歴史も大事ではないか、と歴史への回帰が行われ、前半で言及したコンストラクティビズムや英国学派が見直されてきた。それがこの一世紀間の大体の流れと言えます。

歴史を書き、書かれる存在としての「エージェント」

○質問者B ありがとうございます。山下さんにも伺いたいのですが。山下さんの史観批判の①②のご説明は非常によく分かりました。もやもやしていたものがスッと切り分けられた感じがしました。

ただ、最後に話された、「歴史を書く者と歴史に書かれる者との連続性」という話と、「エージェントの増殖をフォローする」という話がよく理解できなかったので、少し解説していただけるとありがたいのですが。

○山下 ネタばらしをしてしまうと、この話の背景にあるものは私のオリジナルのアイデアじゃなくて、ブルーノ・ラトゥール⁴¹というフランスの科学人類学者が書いていることなんです。下敷きがあるという安心感からちょっと説明が雑になってしまい、いまご指摘をいただいて「しまった」と思っているところです。

「史観批判には外部の視点がない」というところまではよろしいですか。あらゆる史観批判者も、ある史観の中にある。しかも、史観批判と史観構築は連続している。それを突き詰めて言えば、「歴史を書く者と歴史に書かれる者の間に連続性がある」ということでもある。つまり、歴史を書いているつもりが、書いているその人間も別の意味では歴史を書かれている者でもあ

41 ブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour: 1947年～現在) は、フランスの哲学者、人類学者、社会学者。専門は、科学社会学、科学人類学。アクターネットワーク理論 (Actor-network-theory、ANT) に代表される独自の科学社会学の構想によって知られる。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

るし、歴史に書かれている者も、何らかで歴史を書くのに参加していると言える。「外部」が存在しないのであれば、歴史を書くこととある史観を批判すること（＝「史観」を作ること）とは連続しているということになるわけです。そこが、松方さんがリプライでおっしゃったことと似ているのではと思います。

史観批判にどこか外部があるのであれば超越的な視点で歴史を書く特殊な位置があるはずで、その場合は歴史を書く者が主体で、歴史が書かれる者は客体というように存在論的に非対称的な分割が可能になるわけですが、実際にはそれはないので、歴史を書く主体とか歴史に書かれる客体と言えなくなったときに、書く者も書かれる者も全部一緒に表現しようとして出てくる言葉が「エージェント」です。つまり、あるエージェントは、ある場面では歴史を書くという営みに参加しているけども、別の場では歴史に書かれるということに否応なく巻き込まれているということです。

ラトゥールの受け売りですが、「エージェント」は「人」に限りません。「物」も含まれる。岡本さんは生態史観的なアプローチで、歴史を書く者の位置に「物」を引き込もうとしておられるのだと私は解釈しています。そういう意味で、エージェントはどんどん増殖していく。たとえば、100年ぐらい前の歴史は、文字が読める白人男性から見た歴史しかない。それが徐々に、有色人種も入り、女性も入り……つまり、「物」扱いされていた人がどんどん「人」に変わっていく。歴史に書かれる者が増え、またそれと関連していますが、歴史を書く者（非西欧出身の歴史家、女性の歴史家、環境への関心から動物や植物の声を代弁する歴史家…）も増えるわけです。そうしてエージェントがどんどん増殖していくプロセスを追いかけていって記述することによって「史観」自体も変わっていくというかたちでしか、歴史の受容をめぐるこのゆがんだ状況には適切に介入できないのではないかと。

どう言ったらいいんでしょう。「歴史を書く特権」をもつ人はいないし、歴史に一方向的に書かれるだけの存在もないけれど、「ここまで包摂すればもう全部包摂した」ということも言えず、常に流動的だから、歴史を書くこと

と書かれることに参加するエージェントをどんどん広げていく運動をフォローしていくことを通じてでなければ、歴史が本当の意味で社会に接続することはないのではないか、と言いたかったんです。ここまでが私の考える限界なのですが。

「西洋中心主義」は終わっていない

○松方 今のお話に質問があるんですが、本当に、有色人種も女性も歴史を書くことに参加しているのでしょうか？

一年ほど前、イギリスの大学と共同で行われたグローバルヒストリー研究者の交流会に東大Global History Collaborativeのメンバーが参加した⁴²のですが、大変面白く有意義ではあるものの、一方で対話はかなり難しいと感じました。イギリスの大学の研究者グループだけですごい勢いでしゃべっていて、こちらは全然参加できない。英語もできないし。でも、「こいつにも話を振ろう」という流れになって私に振ってもらったので、「全然分かりません」と言ったんだけど、まあ、無視されました。そういうことへの絶望感や無力感があります。私たちは日本語の本なら書けるのだけど……。

○山下 実際問題として足元を見たときに、西洋中心主義批判はもうされ尽くした感もあるんですよね。向こう側には、批判に対して「これぐらい言い訳しておけば大丈夫」みたいな対策マニュアルがかなり整備されている。防衛は鉄壁。そういう感じ、ありますよね？

○松方 あります、あります（笑）。

○山下 向こうはどんどん防衛マニュアルを進化させるので、批判のレベルもどんどん上げていかないといけない。私も、これまでにウェストファリア史観批判をしていて何度も絶望に陥りました。こちらがどう批判しようと向

42 <https://coretocore.tc.u-tokyo.ac.jp/reports/2018/12/warwcik201812.html> に報告記事がある。



こう側はすでに先回りして
言い訳を用意してあって、
それを繰り返していくう
ちにだんだんこちらが袋小
路に入っていく、という感
じ。ウェストファリア史観
批判は、そうした非常に狡
猾な構造があることを指摘
するところで止まっている

んです。だから、松方さんのおっしゃることは大変よく分かります。

西洋中心主義は全然克服されていない。しかし西洋中心主義側の免疫系がきわめて発達していて、そんなに簡単に入り込めなくなっている。かなり早い段階から、「ここでは違います」と反例を一個実証で挙げたぐらいではまったく受け付けられないような防御システムができていて、それぐらいでは向こうは全然動かないんです。史観批判のレベルで、理論的・概念的な批判をぶつけていかないと動かないと思います。そこに、歴史家は特に、非西洋圏の歴史家と私のような雑駁な研究者との間で同盟（アライアンス）を組む動機が生まれる気がします。

○松方 ありがとうございます。「共通の敵を見つける」という古来の方法ですね（笑）。

○岡本 私は勝手に、今のお話でポイントになってくるのはやはり「翻訳」だと解釈しています。西洋人が東アジアの事象を解釈するときにはかなりバイアスをかけて翻訳をして解釈し、認識しています。その解釈体系を分析解明し批判することが突破口になるのでは、という感触はずっと持っています。ただ、そういう議論をすると西洋側からの反応はないんです。「免疫」力のゆえなのか、それとも聞いていないのかよく分かりませんが、話が通じなく

なる経験が何回かあって、そこをもう少しどうにかうまくできないかと考えているところです。西洋人もよく分かっていない概念を我々が提示してみせるといったことが必要なのかな、などと。

松方さんがリプライの初めに出示された『世界史の誕生』は、世界史とは結局ローカルなものなのだという話から始まっています。著者の岡田先生が同書で目指されていたのはおそらく、松方さんがおっしゃったEの歴史なのです。しかしたとえばアジア史においては今、モンゴル帝国史やモンゴル時代史が幅をきかせていまして、モンゴルがヘゲモニーを取った事象を重視すると結局モンゴルがAなりCなりの位置を占めた歴史になってしまうという構造があります。そうした歴史を「男性史観」「中心史観」として桃木先生が批判されているのでしょうか。

こうしてみますと、お互いにいわば陥穽に落ちているわけですし、人間の眼なり頭はしよせん自己中心であって、つねに偏ったものでしかない以上、「中心史観」「男性史観」は免れない宿命ですし、Eの歴史は書いたとたんに、AないしCになってしまうように思います。

これが、山下さんがおっしゃった史観の話につながります。①なのか②なのかということなのですが、それは、人間の思考の営みからすると、免れ得ないパターンのような気もしています。

山下さんや廣野さんがおっしゃったことは非常によく分かるのですが、歴史屋として、じゃあ何か新しいことができるかというとおそらくできない。そうすると、脱却するというよりは、限界を知った上で、結局主観でしかないけれどなるべく客観的であろうとすることでしか眼前の営みはできないのではないかと。そして必ず批判してもらい機会を持ち、自覚的にやっていくことしかないような気がしています。現段階では自覚していない人が多過ぎるので、そこからではないかと。

コンセプト重視の西洋中心主義歴史学に対し、実証は無意味か

○質問者D 今日のお話を伺っていて、コンセプト的に打ち出されている歴

史に対して実証研究が何もできないのだったら、結局のところ、実証研究には意味がないのかという悲観的な気持ちになっています。社会科学的な考え方で見ていらっしゃる方が、実証研究をどう見ていらっしゃるかを知りたいのですが、いかがでしょうか。

○山下 いや、意味がないわけがないです。実証史学は歴史を書くことそのものであって、コンセプトはあくまでそのためのツールですから実証のないところでコンセプトだけあったところで、それは仮説でしかない。コンセプトしかないなら、「あなたの頭の中ではそうでしょうね」という話でしかありませんから、それこそ意味がないと思います。

ただ、コンセプトがどういう方向の実証に価値があるかを強く決定してしまう場面はあると思います。そのことに無自覚過ぎると、「調べて分かることはいっぱいあるけれど、それに何の意味があるかが他人に伝わらない」という状況が発生する。どんな人も全くの真空中で実証研究をするわけではなく、ある事実を突き止めようとする動機を構成する背景に何らかの理論なり概念なり枠組みが入り込んでいます。それが他の分野とどういう関係にあるかについては自覚的であるべきで、実証の人は実証だけやっていたらいいということにはならないだろうと外側から見て思います。

だから今回のように背後の動機なり枠組みなどで共感できると、我々素人には相当細かい実証でも断然面白く見えてきます。反対に、その背後の動機や枠組みや理論やコンセプトが分からないところで、つまりハイコンテクスト（高文脈）⁴³に実証が始まると、「この人は一体何のためにこれを調べているんだろう？」と置いてきぼりになり、ページをめくる手が完全に止まって

43 アメリカ合衆国の文化人類学者エドワード・T・ホール（Edward Twitchell Hall, Jr. : 1914年～2009年）は、世界中の言語コミュニケーションの型を高文脈文化（high-context cultures）と低文脈文化（low-context cultures）に分類した。高文脈文化のコミュニケーションとは、実際に言葉として表現された内容よりも言葉にされていないのに相手に理解される（理解したと思われる）内容のほうが豊かな伝達方式である一方で、低文脈文化のコミュニケーションでは、言葉に表現された内容のみが情報としての意味を持ち、言葉にしていない内容は伝わらない伝達方式である。高文脈文化はより抽象的な表現での会話が可能であるが受け手の誤解などによる情報伝達の齟齬も生じうる。他方、低文脈文化では具象的な表現を行い、会話の文中に全ての情報が入っているため、行間を読む必要もなく、受け手は理解できるといわれている。エドワード・T・ホール（岩田慶治・谷泰共訳）『文化を超えて』（阪急コミュニケーションズ、1993年）。

しまうこともあります。

ですから、さまざまな他の理論枠組みとの関係の中で、自分の立ち位置がどのあたりにあるかについての自覚は必要だし、それを明示化できればその分だけオーディエンスが増えるのは間違いないと思います。

社会学者は基本的に、歴史家に対し、自分たちにはできないことをしている人たちだというリスペクトがあります。社会学者は自分たちが歴史を知らないことにすごく怯えているんです。だから潜在的な敬意は非常に強い。ただ、問題意識の共有がないと読みたくても読めない。問題意識の共有、共感協働のための必要な条件だと思います。

○廣野 山下さんのおっしゃることにまったく同意します。私は歴史家の方や実証研究に対するリスペクトを強く持っている人間ですが、それでも共有できる枠組みがないために結局何が言いたいのか分からない歴史学の本はたくさんあって、それは本当に残念なことだと思います。

山下さんが先ほど、「この本には構造がない」と廣野が言っているとおっしゃいましたが、私は構造がないと申し上げたつもりではないんです。私も山下さんがおっしゃるように、方向性は明らかに見えていると思います。しかし、行き着く先の構造が何か。それが言葉にできない。「華夷秩序」なのか、「日朝関係」なのか、バイラテラルな関係なのか分からないが、「何か」がある。その「何か」とは何ですかと聞いたかったのです。

これは、先ほどの「西洋中心的主義の批判に対する防衛マニュアルがあるから、結局実証を突き詰めても無理じゃないか」という話と関わっています。この「何か」は、たとえば「華夷秩序」のような言葉があれば認識できる。だけど今、ここには言葉としてキャッチーなものがない。

そこで思いつくのは近藤麻理恵さんです。あのお片づけの上手な「こんまり (KonMari)」です。世界中で流行りましたよね。何で流行ったのかと考えると、彼女には言葉があったんです。「ときめき」ですね。英語圏では……

○山下 Spark Joyと訳されていますね。

○廣野 「Spark Joy」という言葉があったからこそ、世界中で流行った。「こんまり」は「ときめき」という言葉で、従来の「機能的に片づける」といったいわゆる西洋中心的な片づけ方に対してオルタナティブを提示しました。そのようなキャッチーな、誰もが「そのコンセプトを中心にして考えるところやって見えるんだね」と思えるような言葉がここにもあれば、と思うのです。私のようなまったくの門外漢が申しあげても説得力がないかもしれませんが、私は岡本さんより少しだけ楽観的で、きっとできるはずだと思うんです。「構造に値する考え方がない」というわけではない。明らかにあります。ないのではなくて、今はそれを表現する言葉がないのではないかと思うのです。

○山下 『国書がむすぶ外交』ファンクラブ会員ナンバー1番と会員ナンバー2番がここにいて、ファンが勝手な希望を言っているようなものなんですけど、それこそアプローチ次第だと思うんです。廣野さんの言っているのは文系的なアプローチですよ。僕は、普遍思考、実は自然科学の文法を借りたほうが表現しやすいのではないかと思うんです。「またがって活動する」や「偉い人」という言葉はすごくロー・コンテクスト（低文脈的）な概念になっていますよね。特定の国や文化と関係ないところまで話が薄まっているので、むしろ自然科学的に記述が可能なんじゃないかという気がするんです。

○岡本 無機質に。

○山下 ええ、無機質に。ある種の進化論的なプロセスとして記述し直すようなかたちです。言説戦略として、一つは廣野さんが言われたような文系的な戦略、もう一つは理系言語を借りた戦略も取り得る。私は後者をイメージ

44 近藤麻理恵（1984年～現在）は、片づけコンサルタントである。初めての著書『人生がときめく片づけの魔法』（サンマーク出版、2010年）が世界40カ国以上で翻訳出版され、シリーズ累計1200万部を超える世界的ベストセラーになった。<https://konmari.jp/about/>（accessed 23 April 2020）.

していました。たかがファンクラブの会員が勝手に好きなことを言いやがってと思うでしょうが。

○松方 いやいや、そんなことないです。ありがたいです。考えます。話はわかりますが、『国書がむすぶ外交』には各論があるんですけど、山下さんのお役に立ちます？

○山下 立ちます。

○松方 ありがとうございます。すごく嬉しいです。

「19世紀言語」を排した言説は一般社会に届くのか

○質問者E 私は、19世紀的な言語を今の我々の日米関係などの問題にどう適用していくかなどを考えて研究しています。

「19世紀的言語」によって現実の社会が営まれているとすれば、それから離れていく、あるいはそれを解体していく作業に対してどれほど市民的に同意が得られるのかという点も、今日みなさんのお話を聞いていて少し考えてしまったところです。

私自身は非常に実証が好きで、「とにかく何か見つかるとうれしい」という司馬遷のような人間なのですが、それによって自分に対するロマンチズムは増す一方で「世間とコミュニケーションができない典型的な学者」になっていく。たとえば、今回の『国書がむすぶ外交』のような非常に浩瀚な書物は広く社会に読まれていってほしいと私は思うんですが、一般社会にとってはハードルが高いようにも思います。

○山下 よく分かります。我々が生きているこの社会は依然として、ある程度は19世紀言語によって統御されている。ゆえに、「19世紀言語」を批判し、「19世紀言語」ではない言語で歴史を語ろうとするとこの社会にはなかなか

伝わらないということですよ。

ただ、いまこの国で暮らす我々は19世紀的近代を生きているわけではなく、非西洋の現代を生きています。19世紀的な近代は我々にとって外から来たものでしかないので、「19世紀的言語」によって可能になっているコミュニケーションが現実の社会で齟齬を起こしているケースはたくさんあると思います。たとえば“国家”や“市民”や“社会”などの言葉はそれこそ漢語を使った翻訳語ですが、“市民”の概念は日本語の中でも独特な位置を占めていて、しかも今かなり揺らいでいると思います。決してかっちり固定された概念ではない。

そのときに、歴史学の研究成果として、あるいは研究のアプローチとして「19世紀言語」の外に出る言語を使う、あるいは別の言語を紡ぎ出すことは、現実の世界がある種の機能不全を起こしつつある「19世紀言語」の外側に出ることの助けになるはずですよ。

歴史学の古典的な社会的意義は、現在に対して未来のオルタナティブを作るために、未来へのオルタナティブへの想像力を鍛えるために、過去にどれだけ違う社会があったのかを知ることだと思います。そうした歴史学の役割は、「19世紀言語」の批判を通じて回路として接続するポイントがあるのではないかと僕は思うのですが。

○岡本 今のご指摘は、まさに私が問われていると思います。「分かる言葉で表現しなくては」というお話には全面的に賛成です。私も古い歴史しかできない「男」なので（あえて「男」と言っています）そこが問題なんですけど。

先ほど重箱の話が出てきましたが、隅をつついていてる人はたいいてい、そこが隅だとは思っていませんよね。私や松方さんは明らかに隅に追いやられている認識（被害妄想かもしれない）が非常に強いので「自分がいるのは隅だ」と分かりますが、ほとんどの歴史家は「自分が突き止めようとしているこの事実が判明したら、その重要性はきっと自ずと人々に伝わる」と思っている。そこが一番の問題で、ほとんどの人は分からないのが現状・実情で



す。「立ち位置」に頓着しないからです。自分の経験で少しは自覚するようになりまして、たとえば「男性史観」といわれたら、私はひとまず納得します。ですが、言ったほうも実はそう言った瞬間に「男性史観」「中心史観」になっている

のでして、そこにお気づきいただけない。ですからわたし自身の実践、表現・伝達の効果が上がってこないのです。コミュニケーションなので、相手も最低限は分かってもらい必要がある。山下さんのお話でいえば、歴史を読む人も歴史を書く人も、史観を論じる人も実証をする人も、「立ち位置」にもっと自覚的に敏感になる必要があると思います。また、コンセンサスがまず必要になっていきますので、今日のような機会がそういうきっかけの一つになればと思う次第です。

隅、あるいは周縁にいないと見えないことはたくさんあります。松方さんの本の話で言えば、国書でないと分からない世界があり、それを本書で表現されたと思います。「それ」とは、廣野さんの表現を使えば、どこかにあるはずの「構造」だと思いますし、山下さんは「史観」の多様性と言われたと思いますが。そういうものを、史料を通じて示すことができるというのが我々の特権であり、自分自身の仕事にポジティブさを見出せる部分です。ただ現実にはコンセンサスが乏しく、史料・実証を用いてもなかなか通じないので、いつもジレンマに陥っているところではあります。

ですので、今回『教養としての世界史』の本を作るにあたって山下さんとご一緒させていただいて、そうしたことを非常にクリアな言葉で翻訳していただいたという快感と喜びがあったということは、ぜひ付け加えておきたいと思っています。そういうことが一般の歴史学の実証にもつながっていく

と、もっと豊かな世界が広がるんじゃないかと思います。だいぶ先の話になるかもしれませんが、できないはずはないだろうと思います。

○松方 質問者Eさんのご意見について、私も一言コメントさせてください。私の考えは山下先生がおっしゃったこととまったく同じです。私が、なぜ「19世紀言語」にこだわっているかという点、「19世紀言語」では、21世紀の現実を記述できなくなりつつあると思うからです。しかしこう言うと、たとえばアメリカ人の若い研究者は、「だったら21世紀の言葉を使えばいいじゃないですか」と言うんです（笑）。たとえば“環境”などのように、19世紀には問題にならなかった言葉を使ったらどうですか、と。そうした方々は「19世紀言語」の問題はすでに片づいたとして先へ行こうとしますが、私は、まだ分かってない、納得できない、片づいてないと思っているんです。本書はそこを何とか片づけようとする試みでもあります。それが翻訳の問題と関わっていて、『教養としての世界史の学び方』でも、何度も問い直しておられるところだと思います。

だから、むしろ19世紀言語を解体しようとする試みにこそ新しい芽があるのではないかと思うのです。先ほどの「エージェントを増やす」というお話で言えばまさに我々が増やさなくてはいけない側で、増やす動機や材料は我々のモヤモヤの中にある。だから「19世紀言語」にこだわるのです。

自然科学的に歴史を記述するとはどういうことか

○質問者F 私は、理学工学が抱えている問題について考えるヒントを得たいと思って今日ここに来ました。

先ほど山下先生が、歴史学に自然科学的要素を取り入れるといいのではとおっしゃっていました。それが私のつかまりたい紐のように感じたのですが、もう少しそのあたりをお話いただけますか。

○山下 並み居る歴史家の先生方の前で、この話をするのはかなり緊張を強

いられるんですが（笑）。

古臭い歴史像に基づく藁人形論法だと言われるかもしれませんが、非常にざっくり言うと歴史学にとって、歴史とは基本的に、人間の「意志」が歴史をつくっていくという強い前提の下に書かれてきた歴史があると思うんです。

ただ、ここ20~30年ぐらいの歴史研究の大きな流れとして、歴史学の外から人類社会の過去を問おうとする人たちによって「歴史が紡がれていく上で、人間の持っている主体性とはそれほど特権的なものなのか。少しダウングレードして考えないといけないのではないのか」と言われるようになってきていて、オルタナティブな考え方もたくさん出されています。

たとえば、古典的なところだとジャレド・ダイヤモンド⁴⁵などは生態史観に立って、人間以外の要素が歴史の展開に対してどれだけ強い説明力を持っているかを取り入れている。つまり人間以外のアクターも歴史を作る。まさに「エージェント」として参加しているのです。

『教養としての世界史の学び方』で、その点を完全に取り込むことはできなかったのですが、本書の続編にあたるプロジェクトを別のメンバーで進めようとしています。そこでは「ポスト・ヒューマン」という概念を掲げて（ポスト・ヒューマンといっても人類がいなくなった後の話ではないですが）も、近代が思い描いていた「『意志と理性を持った存在』が、自然や伝統を克服して歴史をつくっていく」といった歴史の見方をどう変えるか、それとは全然違う立て付けで歴史を書き直し、そのとき“所有”などの「19世紀言語」がどれくらい違って見えるかといったことを考えようとしているところです。そういった意味では、社会科学と人文学との対話は大事ですが、自然科学との対話も非常に大事だと思っています。

45 ジャレド・メイスン・ダイヤモンド（Jared Mason Diamond, 1937年~現在）は、アメリカ合衆国の進化生物学者である。代表的著書の一つの *Guns, Germs, and Steel: the Fates of Human Societies*, W.W. Norton, 1997（倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄——1万3000年にわたる人類史の謎（上・下）』（草思社、2000年））では、「なぜヨーロッパ人がニューギニア人を征服し、ニューギニア人がヨーロッパ人を征服することにならなかったのか？」という疑問に対し、「単なる地理的な要因」であったという仮説が提示された。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

「意志と理性をもった人間」と「啓蒙の暴力」

○松方 「歴史を作っているのは意志と理性をもった人間ではない」という話はわかるのですが、そうやってしまうと、今まで社会科学や人文学などが描いていたある種の「理想」や「価値」を否定する、あるいは諦めることになるように思うのです。それは、人文学不要論に代表される人文学の危機や、人間はもう不要でAIで十分といった「人間性の諦め」のようなものと強く関わっているような気がします。私はまだ人間の「価値」を諦めたくないのですが、どう思われますか。

○山下 難しいところだと思います。「啓蒙」をどう評価するかということだと思うので。私は世代的にはポストモダンな刷りこみが強く、どちらかといえば自分は「啓蒙の暴力性」に敏感なタイプに属すると思っています。人間を「意志と理性を持った存在」として描くことによって抑圧される存在のほうに目が行ってしまう。だからそれを自然科学のツールなり視点なりで相対化できると自然科学の側から呼びかける声が聞こえると、ふらふらと行きたくなくなってしまおうんですが、他方で、先ほど言及した歴史認識問題もそうですけども、「今ここの社会に啓蒙が必要なのではないか」という立場もありうると思うのです。ただ、その啓蒙は、より広い意味での普遍性を考えなくてはいけない。その広い普遍性を考えるプロセスにおいて、西洋近代が考えた非常に理念系的な人間はいったん相対の括弧に入れなきゃいけないし、括弧に入ると、その人間観を前提に書かれてきた「ランケ⁴⁶以来の歴史」は総体として何らかの反省は要るのではないか、というのが私の立場です。

自己の「史観」を自覚し、多くの試行錯誤と批評を受ける機会を

○岡本 私も山下さんがおっしゃるとおりだと思うのですが、大きな問題は「では、具体的に何をどうするのか」だと思います。たとえば自然科学的な

46 レオポルト・フォン・ランケ (Leopold von Ranke, 1795年～1886年) は、実証主義に基づき、史料批判による科学的な歴史学を確立した。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

要素を取り入れるとは、実際にはいったいどういうことをするのか。私が繰り返し言っている「自己の史観に対して自覚的であること」もこれと同じで、日々の営みの中で具体的に何をするのかというと相当の難問だと日々感じています。

我々の研究は史料があって初めて成り立つものであり、それは史料に呑み込まれるということでもあります。今日さまざまなお話を伺って、史料の扱い方や解釈の仕方、位置付け方は理論的あるいはマニュアル的によく分かったのですが、では具体的にどういう歴史の史料の扱い方をして歴史像を描いたら社会科学や他の領域に還元できるのかについては、やってみないとわからない。おそらくその営為を言語・文章で表現して、いろいろな本を作って共有し、多くの人に叩いてもらい、試行錯誤するしかできないのではないのでしょうか。つまり「議論はともかく、やりましょう」ということです。私もこれからあと4～5年くらいは研究者として、自分で考え、書いていきたいと思います。

「アゴラ（広場）」の役割とは

○松方 「意志と理性を持った存在」の相対化が、それに賛成でも反対でも、まさに21世紀の問題だと、私は思っています。「意志と理性の人間」の話はちょっとさておき、そういう人間の特性が発揮される場というのは、「アゴラ」ではないでしょうか。

「アゴラ」というのは、私特有の意味合いで使いましたので、以下に説明いたします。

「アゴラ（広場）」とは議論の場、狭いところだと議会や裁判所、学会やこうしたセミナーなどの場だと思います。こうした場ではみなそれぞれ、あの人は教授だとか、あの人は東京の出身だといった属性や立場からある程度自由になって、つまり「一人の人間」になって対等な立場で議論できる。それは非常に幸せな場ではあるが、参加するにはある種の特権が必要である。たとえば、「そのための特殊な訓練を受けている人のみ」「選挙で選ばれた人の

み」など。国会のような狭い場ならば、そうした制限も比較的多くの人が納得できるけれど、そのアナロジーとして、もっと広い、たとえば、“ヨーロッパ”だったら納得できるか。“市民社会”ではどうか。“市場経済”ではどうか。『教養としての世界史の学び方』で“市民社会”や“市場”を問い直されているのは、アゴラ概念の過剰適用に対する疑念がおありだからなのではないだろうか、と私は思っています。山下さんがおっしゃるとおり、まさに今こそ啓蒙が必要だと思いますが。

ある人がアゴラを必要とするのは、その人がアゴラの外にいるがゆえだろう。もし仮に私が何かひどい抑圧を受けていたとして、それに対して異議申し立てをする場、たとえば裁判所とか法廷なりがきつとどこかにあって、私の言うことを聞いてくれるに違いない、アゴラがどこかにあってほしいと思うだろう。あるいは、私の上司は私を怒鳴ってばかりいるけど、出るころに出れば、私は公正に扱われるという場があってほしいというようなことがある、と。けれど、アゴラの中の人たちが、明日の食費を稼ぐことに必死だったら、何が正義かの議論はできないわけです。議論をするためには時間的経済的余裕、つまりは特権が必要なんだけど、この特権のある人たちの生活を守っている一裁判官や議員さんにお給料や報酬を払っている一のは、実はアゴラの外にいる普通の人たち（の税金）で、その人たちが必要だと思うからアゴラがあるんじゃないか。つまり、アゴラは「作られた」と思うのです。しかし、そのアゴラがいま機能不全を起こしていて、とくに“市民社会”とか“市場”のように広い空間（？）にまで過剰適用しているなどのさまざまな問題がある。たとえば、ヨーロッパ人は入れるけどアジア人を締め出す巧妙な狡猾な仕掛けがあるとか。それに対する異議申し立てを試みるのが私の戦略です。だけど、じゃあアゴラを全員が諦めたときに、対案はあるかといったら、今のところはない⁴⁷。

同じ人間でも、外にいるときはすごく個別的な、ある特定の親の下に生ま

47 その後、この部分は、松方冬子「普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー①～④」（『UP』568～571号、2020年2月～5月）として成稿した。

れたある個別的な存在なんだけれども、その人がある場所に出たときに、意志と理性を持った人として扱われる。だから、同じ人が生まれたときから死ぬまで意志と理性を持っているわけじゃなくて、使い分けることは可能である。だけどその使い分けは失敗していて、機能不全を起こしている。「19世紀言語」でいうと、今まではヨーロッパ言語を漢語に訳して人に教えられる人を“東大の教授”と呼び、それが“東京大学の権威”だったけれど（実は今でもそれは権威だと思っている人はいっぱいいるが）、21世紀でもそれは権威か？ということが問われている。それは先ほど質問者Eさんがおっしゃった話と関係があると思います。「19世紀言語」によって動いているという側面もあるけれど、実際には機能不全を起こしているという感触を持っています。

○山下 よく分かりました。私は、意志と理性を持った存在としての人間を全否定しようとか、完全に外側に出る枠組みで考えよう、と言おうとしたわけではないんです。

前半の私の話に出てきたラトゥール氏が言っていることですが、人間は常に主体というわけではない。物も常に客体というわけではない。ただ、すべてを「エージェント」として見た場合に、いろいろなつながりの連鎖があるわけです。僕が水を飲もうとして水のボトルを持ったら、逆にこのボトルの冷たさに影響されて、水を飲む前に、ついボトルを首にあてて体を冷やす行動が先に出てしまうとか。人にも物にも、主体として振る舞っているときと客体として振る舞っているときがあるということを認めよう、と言いたいだけなのです。

ただ、特定の条件が与えられれば、人間は割と一貫して主体として振る舞う傾向がある。ゆえに、人間がその歴史を作る意志と理性を持った「エージェント」として振る舞うこともある。かつてであれば「それこそが人間」と定義されたのだけれど、それは単に「そういう場合もある」というだけである。外交官外交が、その他もろもろのいろんな「偉い人々」と「またがって活動する人々」の間で繰り広げられるさまざまな営みの中の一つの特殊ケースで

あるように、人間が意志と理性を持って歴史を作っていると見える場面も、実はもっと大きな歴史の中では、特殊な条件の中で起こっていることである。さらにその中の一つのバリエーションが西洋中心主義的な歴史の読み方だ、ということだと思えます。

全面的に否定して書き換えようという話ではなくて、それが特殊例であることが分かるような枠組みを考えましょうということです。

○松方 ありがとうございます。非常に深い議論ができたように思います。本日は和やかながらも活発な討論にご参加いただき、本当にありがとうございました。(拍手)